悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.3
Aug. 8月
2015年8月15日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

戦後70周年記念企画
「私の八月十五日」

① ◆小早川富夫
（87歳・八雲町東岩坂）

昭和19年（1944年）春、私は海軍乙種飛行予科練生、いわゆる海軍少年飛行兵（略して予科練）を志願しました。16歳でした。最後の予科練生であった私達第24期生は全国で9110名が採用され、最年少は13歳8カ月、現在の中学2年生在学中でした。

11月30日、日吉地区の神納橋たもとの堤防の上、ちょうどこの会場になっているあたりで、多数の人に見送られて出発、翌12月1日、鹿児島海軍航空隊に入隊しました。予科練を巣立った若者たちは太平洋戦争において航空戦力の中核となりました。特別攻撃隊員となり、特攻機に250キロの爆弾を付け、片道の燃料だけを積んで敵の艦船への体当たりを決行しました。予科練出身者の8割が亡くなりました。その多くは17歳から22歳であります。祖国の将来を少しも疑うこともなく、ただ救国の一念で、無限の未来を秘めた生涯を捧げたのです。これが戦争というものです。

出発前夜、それまで私の入隊について何も語らなかった母が「行かないでくれ」と頼みました。母は当時52歳、前年に父が亡くなっていました。時代は戦争一色で、男子は戦争に必ず行くものと教育されていたとはいえ、母と十分な相談もせず、また家族のことや家の生活など深く考えなかったことを、心から懺悔しています。

私たち24期生は昭和20年（1945年）3月までは基礎訓練を受けていましたが、3月18日の大空襲で基地は壊滅的打撃を受け、機能を失ってしまいました。このため、4月上旬、24期生は海軍部隊へ分散、転属されることになりました。私が所属する分隊は、鹿児島県の南東部、大隅半島の中ほどにある鹿屋航空基地に転属になりました。ここは九州南方に迫ったアメリカ艦隊より飛び立った爆撃機の九州全土への空爆の通過空域になっていたため、連日、昼夜を問わずひっきりなしに敵機が飛来し、爆音が途絶えるのは早朝の3時間程度という状況でした。

この基地では、敵の本土上陸近し、ということで、九州最南端での本土決戦に対応するための備えが急ピッチで進められており、私たちは次々に送られてくる大量の砲弾、銃弾を備蓄のために横穴壕に運び込むことから始め、やがて高射砲陣地などを造る土木作業に従事しました。基地の兵舎、格納庫、滑走路、砲台施設を狙った空爆は数え切れず、その都度、作業を中断し退避しなくてはならず、戦場そのものでした。なかでも、敵機が突然現れ、急降下で機銃を打ちながら自分たちに向かって突っ込んでくるときほど恐怖を感じたことはありません。爆弾を5メートルほどの至近距離に受け、伏せていた背中に爆弾により吹き上げられた大量の土をかぶり、しばらく立ち上がれなかったことを記憶しています。

8月15日はバラック兵舎の中で迎えました。爆撃でラジオも壊れていたので、終戦の放送は聞いていません。17日になって上官から「日本は負けた、戦争が終わった」と知らされました。そして「間もなく敵が上陸してくる。君たちは自宅に向かっても、山に逃げてもよい。とにかく直ちにこの場を離れよ」との命令が下されました。中四国出身者の仲間5人と、最寄りの日豊本線志布志駅まで40キロの道のりを7時間かけて歩きました。持ち物は身の回り品と毛布だけ。食料は全くなく、皆帰りたい一心で空腹に耐えました。夕方、駅に到着しました。しばらくして到着した列車は超満員、見る見るうちに客車の屋根の上までいっぱいになりました。諦めかけていた矢先、機関車の屋根の上が唯一空いているのを見つけ、機関車の上に毛布を敷いて座り、我慢することにしましたが、耳元の汽笛の音には閉口しました。

日豊本線は爆撃で線路が寸断されていたため、途中、夜中に何度も下車して次の発車駅まで歩くことを繰り返しました。空腹と不安の中でたどり着いた門司駅で、四国方面に帰る仲間と別れ一人になった私に、居合わせた陸軍の兵士が事情を聞いてきました。その兵士は「腹が減っているだろう、残りご飯でよかったら食べろ」と自分の飯盒を差し出してくれました。「地獄で仏に会う」とはこのことです。涙が出るほどありがたかったことを忘れません。その方は陸軍の下士官でしたが、名前を聞かなかったことを後悔しています。

松江駅に着いたのは翌日の午後3時頃でした。家に帰っても、爆撃や機銃掃射の夢にうなされて、目が覚めることを繰り返しました。また、どうしても忘れることができないことがあります。松江から一緒に入隊した同期の一人が、転属先の特攻兵器「特殊潜航艇」いわゆる人間魚雷の訓練基地で終戦を迎え、兵器の整理作業中に兵器が暴発し命を落としてしまったことです。戦争が終わったのに、なぜ一緒に帰ることができなかったのか。悔やんでも悔やみきれません。

戦争当時、世間知らずで、分別もなかった私を励まし、応援下さり、また入隊後、農業や家のこと、母をいろいろとお世話、ご援助いただいた近所の方々、地区の方々に深く感謝しています。戦争が終わってからずっと、この気持ちを忘れたことはありません。そして、これからも一生忘れません。

戦争は二度と繰り返してはなりません。

② ◆須山　和子
（83歳・八雲町熊野）

太平洋戦争が始まった昭和16年（1941年）12月8日の朝は、冷たい霙（みぞれ）が降っていました。当時、私は9歳、国民学校の4年生でした。朝礼の時、校長先生から日本が米英と開戦したお話があり、その後、全校児童が裸足で熊野大社へ行き、必勝祈願の参拝をしました。

年が明けると、軍隊へ召集されて出征する人が多くなり、武運長久の祈願祭や、道端で万歳を叫んで兵隊さんをお見送りする回数が増えていきました。

私たちの学校生活も大きく変わり、勤労奉仕の作業が多くなりました。まず、校庭を開墾してサツマイモを作りました。それから各地区の出征兵士のお宅の農作業の手伝いに行くようになり、自分の背たけくらいの鍬を背負子（しょいこ）に入れて学校に通いました。

次第に授業時間が減り、朝1時間だけ授業だったり、授業がまったく無い日も増え、来る日も来る日も開墾などの作業に出ました。

学校から列を作って目的地に向かう時は、「天に代わりて不義を討つ、忠勇無双の我が兵は」などと軍歌を歌いながら歩いたものです。

戦後70周年記念企画
「私の八月十五日」

奉仕作業は行き先によって田圃打ちや草刈りなどいろいろでした。まだ小さかったため、家で農作業を手伝ったことがなかったので、いきなり田圃に連れて行かれた時は、ヒルに咬まれるなどつらい思いをしました。また、田圃への客土のために、背負子に土を入れて河原から運ぶ作業も、とても重くつらいものでした。

その頃、学校でも竹槍訓練が行われており、私たちも竹槍をかついで登校しました。また、下校の際には、敵機に見つからないように県道を避け、脇道や山道を選んで歩きました。防火訓練や避難訓練も盛んで、集団で下校する時、班長さんの「敵機来襲、伏せ」の号令で目と耳を指で押さえて道端に伏せ、「空襲警報解除」の号令で立ち上がり、家に帰ったものです。

とくにつらい思い出は村葬のことです。戦死された兵隊さんの葬儀は、小学校の講堂で村全体の葬儀として行われ、私も何回も参列しました。村葬は厳粛で印象深く、席順まで覚えています。「海行かば」の葬送曲の中、どこからともなくすすり泣きが洩れ、私も涙がこぼれました。その後、英霊のご自宅での葬送にも参列しましたが、本当につらく、悲しい想いをしました。

昭和20年（1945年）8月15日、終戦の日は家に居ました。国民学校高等科2年生になっていました。7月いっぱいは田の草取りの奉仕作業に出ていましたが、8月に入ると、新型爆弾が広島に落ちたので登校しないように、とのことで夏休みになっていました。ラジオの前に集まって重大放送を待っていました。ちょうどラジオが壊れていた隣の家のおじさんも来ておられ、そのおじさんが「戦争、終わったと」と、ぽつりとつぶやいて帰られたのを覚えています。

戦争に勝つために、勝つまでは子供心で信じていました。何事も戦争のためだからと組み込まれていき、「なぜ」と疑問をはさむことは許されず、ただ黙って言うことを聞くしかありませんでした。教育のおそろしさを、今にして痛感します。また、戦争のこわさは、人間のおろかさ、心の貧しさがむき出しになることです。

おかしな時代に巻き込まれたものだと、思い出すと腹の立つことが多々あります。でも、いつまでも腹を立てていても仕方がないので、私は何が本当のことだったのかを知りたくていろいろと本を読むようになりました。

戦地で戦われた方や、原爆や空襲にあわれた方に比べれば私の体験など些細なものかもしれません。しかし、戦争のみじめさ、哀しさを、身をもって味わった者として、子孫に戦争の悲惨さを語り継ぐことが大切だと思っています。

③ ◆石原 茂
（86歳・八雲町熊野）

昭和18年（1943年）3月、国民学校高等科2年の卒業を待たずに、私は満蒙開拓青少年義勇隊に入隊しました。15歳でした。

満蒙とは、当時日本の支配下にあった中国東北部の満州国と、現在の内モンゴル地区を指します。昭和6年（1931年）から昭和20年（1945年）までの14年間に国策として満蒙開拓団27万人が移住しました。このうちの3割に当たる8万6千人が青少年義勇隊でした。開拓・増産による日本本土への食料供給と、当時のソ連と満州国の国境警備が2大任務でした。

3月12日、熊野大社で安全祈願祭と壮行式があり、島根中隊263名の結成式が行われる松江城二の丸広場に向けて出発しようとした時、熊野大社前のお店のおばさんが駆け寄ってきて私の手を握り「こんなにこまい子を満州なんかに行かせるなんて、まあなんとしたかわいそうなことだ」と言って涙を流されたことは今でも忘れません。

当時の出征軍人と同様、歓呼の声や旗の波に送られ松江駅を出発し、茨城県の内原訓練所に向かい、そこで2カ月の基礎訓練を受けました。

その後、下関から関釜（かんぷ）連絡船で釜山（プサン）に渡り、中国を北上し、目的地の満州国・勃利（ボツリ）訓練所に到着したのは昭和18年（1943年）5月15日のことでした。それから1年後の昭和19年（1944年）2月には東安（トウアン）適正訓練所に移りました。ここは3分の1が満州国領、3分の2がソ連領という興凱（コウガイ）湖のほとりで、まさに国境の最前線でした。

広大な荒野の中で、故郷を遠く離れて暮らす、14歳、15歳の私たちが苦しんだのは「屯墾（とんこん）病」いわゆるホームシックでした。家族からの手紙や慰問の小包が届いた夜など宿舎の闇の中、あちこちからすすり泣きが聞こえてきました。

昭和20年（1945年）8月9日未明、私達を悲劇が襲いました。突如、ソ連軍が侵攻を始めたのです。湖からのソ連艦船の砲撃により訓練所の舎屋は破壊されました。それから山に分け入り、鉄道をいくつか突破する決死の逃避行となりました。避難する日本人の群れは大地を這うアリの行列のようでした。それを目がけてソ連空軍機が機銃掃射や爆撃を繰り返しました。弾丸が体をかすって私の服はボロボロになりました。

昭和19年（1944年）7月サイパン、8月にはグアムの日本軍が玉砕し満州に居た日本の関東軍は南方に送られる者が増えていきました。避難民の中には、夫に残された軍人の奥さんも含まれていました。3人の子供を連れた奥さんもおられ、疲労困憊して背負った子供を草むらの中に置き去りにせざるを得なくなる。夜になると狼が出て子供は食べられるかもしれないという状況です。運のいい子は中国人に拾われて養育される。それが今日、中国残留孤児といわれる人々です。

そんな地獄絵図のただ中で、8月15日の終戦を知りようもありませんでした。

横道河子（オウドウカシ）という所で、ソ連軍に収容されました。その時初めて、ソ連軍兵士から日本人通訳を通して「戦争は終わった、日本は負けた」と聞かされました。8月29日のことでした。

その後、海林（カイリン）に連れていかれ、仕事のできる者とそうでない婦女子の選別があり、仕事ができる者は皆、ソ連へ送られました。

我々は少年でしたので残されました。そこで3カ月ほど、関東軍が隠していた物資の捜索や積み出しをやらされました。

それから、私は哈爾浜（ハルビン）の収容所に入れられました。零下40度になる極寒の地でした。ソ連軍兵士は時計をはじめ貴金属を取り上げ、日本女性を要求するなど横暴の限りを尽くしました。

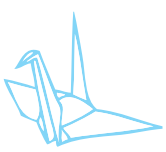
20日間ほどそこに居て、石炭を運ぶ屋根の無い無蓋車で南下しました。体を寄せて温め合い、夜に赤ん坊が泣くと馬賊に襲われるというので、みんなであやしました。連帯責任とはどういうことかを、その時痛感しました。

1週間かけて満州国の首都であった新京（シンキョウ）に降り立った私の全財産は饅頭1個、まさに裸一貫でした。偶然、私が今も命の恩人と仰ぐ一人の日本人に出会い、仕事を紹介してもらい生き延びました。

山口県の仙崎港に帰り着いたのは昭和21年（1946年）7月30日でした。伝染病の検疫などのため、上陸できたのは1週間後でした。

それから列車で島根に入り、宍道湖を見た時「やっと無事に帰った」という実感がこみ上げてきました。

私たちは数多くの同胞を失いました。平和こそ真の幸福の礎です。2度と戦争のない社会を実現するために努力することが、生き残った私の使命であると固く信じています。



「私の八月十五日」という題は、今人舎（村尾靖子著「悠久の河―周藤彌兵衛翁物語」の版元）**発行の書籍名を使用しています。**

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。
ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。